CHAPTER 6

スクエア・トークセッション メディアテークをre-designせよ 共有のデザイン100のアイディア

2003年3月20日(木)　18:30−21:30

5回にわたり行われてきたトークセッションは、人々が緩やかに場を共有しながら、コミュニケーションや活動が立ち上がっていくような状況をつくりだすことをデザインの新しいテーマとして考えてきました。最終回にあたる第6回は、「スクエア・トークセッション　メディアテークをre-designせよ　共有のデザイン100のアイディア」と題して1階オープンスクエアへ場所を移し、メディアテークという「現場」で、ゲストも参加者も一緒にアイディアを考えるワークショップとなりました。座って話を聞くだけではなく、アクティブに考えること。ちなみに、参加者には「座るもの」持参で集まってもらいました。

渡辺保史――以前から、最終回はいつもの７階スタジオｂではなく、ここ１階のオープンスクエアを使って、少し形を変えてやってみようと考えていました。
小川さんと打ちあわせをする中で、せっかくだから、今まで来て下さったゲストのみなさんに一緒にもう一度来てもらって、今回は「メディアテークそのものの『共有のデザイン』をみんなで考えてみたらどうだろう？」ということになりました。これまでのトークセッションは、主にゲストの方々にネタを持って来てもらっていましたが、今回は、メディアテークの活動をどうやって「自分たち事」として組みかえていくことができるのか、具体的なプロジェクトなり、仕組みのアイディアを、みんなでブレインストーミングをしながらまとめていくワークショップをしよう、というわけです。
残念ながら第５回のゲストである辻信一さんは、教えておられる大学の卒業式のため欠席ですが、辻さん以外の４人のゲストの方々には、事前にメディアテークの活動のあり方について、こちらから「宿題」を出しました。これが、新しいプランのアイディアになるものです。後ほど、それについてプレゼンテーションをしてもらおうと思っています。それを踏まえて、そのアイディアをどれだけ進化させられるか、もっと具体的に実行可能なアイディア、あるいはもっとおもしろいプランにできるか試してみましょう。
今回は場所も違いますが、場のしつらいも少し変わった趣向になっています。すでにご案内の通り、みなさんに「座るもの」を持って来てもらいました。何のことかよく分からなかった方もいるかもしれませんが、何もない空間にみんなが思い思いの「座るもの」を持ち寄って、ゼロから場をつくるところから始めようという意図です。
ここで、１回目のセッションに来て下さった方はピンと来るかと思います。フランスの公園にある、持ち運び自由な椅子の話に触発されたわけです。
まず、紹介もかねて、ゲストのみなさんの椅子のことをうかがっていきましょう。１回目のゲストに来ていただいた西村さんです。これは、かなり古そうな椅子ですね。

西村佳哲――たぶん南の方の……。

渡辺――手彫りのようですね。

西村――渡辺さんも１回来たことがありましたが、年末になるとオークションパーティーをやるんです。自分が持っていて、もう要らないけれども、これはいいというものを持ち寄って、オークションをしあ

うパーティーをやるんです。そこに友達が出したもので、1000円で落札しました。

渡辺——杉浦さんは、背骨を伸ばすための……椅子というよりも、玉ですね。

杉浦裕樹——これはうちのおふくろが運動のために買って持っていたのですが、一度も使っていなかったものです。はねたり、背中に敷いたり、いろいろできるんです。よく弾みます。

渡辺——バランスを崩すと怖そうですね。前田さんは、小ぢんまりと座っていて、何もないように思われるんですけれども、どうなっているんでしょうか。

前田邦宏——携帯できる正座用椅子です。僕が初めてこれを見たのは、お茶の席でした。足のよくない人、ひざを痛めている人が正座をしながらやりたいというときに使う椅子です。僕は足が悪いわけではないのですが、欲しいなと思っていたので、仙台のお茶屋さんをちょっと探したら、すぐ見つかりました。ここはお茶の街ですね。

渡辺——さすが茶人の前田さんです。森川さんは、見てのとおりの(笑)、木の切り株ですね。

森川千鶴——座るものを持ち寄りましょうと聞いたときに、切り株といきなり頭に浮かんでしまったので、探しました。私は東京の多摩ニュータウンというところに住んでいるのですが、その地域のメーリングリストに「切り株を手に入れられませんか」と流したら、いろんな情報が寄せられました。これは、長池公園という里山がちょっとあるような公園の作業小屋にあった、桜の木だそうです。

渡辺——そうですね。木肌は確かに桜ですね。

森川——みなさんが普段椅子で使っているものらしいので、使い込まれた感じもあるんですけれども、今朝仙台に届いたそうです。

渡辺——会場を見渡すと、敷物を敷いてまるでお花見のような方々がいれば、木の椅子があり、迷彩色のエプロンに腰かけてる方や、学校の理科室にあった懐かしい感じの腰かけも見えますね。いろんなものを持ち寄って、でこぼこのある状態で不思議ですね。ご案内のポスト

カードにも、いろいろな椅子がランダムに置いてあって、集まってきている共有感覚をデザインしたつもりなので、そういう場がつくれているのかなと思っています。

さて、それでは本題に入っていきましょう。今日のゲストの方々には、事前に「宿題」を出しています。今からそれを一人ずつ、5分間で発表していただきます。そして、それが終わった後に、参加者のみなさんとディスカッションして個々のアイディアをよりふくらませていきたいと思います。
それではまず、西村さんからお願いします。

西村――共有のデザインというテーマを考える前に念頭に置いていたのは、「自分たち事」と「脱便利主義」そして「新しい組み合わせ」という3つの要素です。
まず、「自分たち事」です。普通、世の中の物事は、「自分事」か「他人事」の二つです。でも、その二つの間に、「自分たち事」という領域があるのではないかという発言が、第1回のトークセッションのときにありました。僕は、初めてその言葉を聞いてとても大切にしたいと思いました。
次の「脱便利主義」ですが、便利主義が気に入らないんです。便利であるというのは非常に分かりやすい価値観ですが、だから全てが良いというわけではない。みんなが生き生きとして力を発揮するときというのは、条件が完全に揃っているからではなくて、どちらかというと「……にもかかわらず」というような状況の時に力が出るんです。
たとえば、プロジェクトをやるときに、プロジェクトルームが用意してあって、すべてがお膳立てされているからコラボレーションが進む

というわけではありません。新しいことが始まるときには、駅のホームで4時間も立ち話をしてしまったとか、何か必ずちょっと無理をしていながら、でも自分たちが力を発揮した場所がある。便利なものや、あてがいものをいろいろサービスするということから脱した方がいいのではないかと思っています。
最後の「新しい組み合わせ」ですが、僕は、世の中には全く新しいアイディアというのは存在しないと思うんです。アイディアというのは常に、既にあるいろいろなものの「新しい組み合わせ」です。以上の3つの点を基本に、宿題を考えてみました。
そして、出てきたアイディアは「ブックシェアマーケット」「仙台凡人展」「シースルーマークアップ」「日がわりマスターカフェ」です。今日、またメディアテークに来てみて、このうちシースルーマークアップはできないことがわかったので、残り3つを説明しようと思います。後ほど、みなさんのリアクションとかを見ながら、どれについて深めていくか考えていきたいですね。
「ブックシェアマーケット」は、日本人の蔵書率が非常に高いところに着目して、みんなの本を共有財にしようというアイディアです。フランスで、僕と同年代ぐらいの人の家に行くと、本棚には本があまり置いてありません。図書館の利用率が高いんですね。どうやら、共有ではなくて所有の習慣がついているのが日本人といえるかもしれません。
だったら、家の中にたくさんある本をみんなで共有する方法はないだろうか？　僕は一時期、東京の下北沢という街に住んでいたのですが、若者が多くて、彼ら目当ての古本屋さんや中古 CD ショップがたくさんありました。すごいのは、たとえば奥田民生の新譜が出るとと、発売日の朝11時には中古屋さんにもう並んでいるんです(笑)。いち早く買って、MD などにダビングしたら、すぐに売ってしまうわけですね。発売直後が一番高く売れますから。
この下北沢のことが頭にあったので、自分たちが持っている本や CD を、私的な所有財ではなく、流動財というか、共有財産になる仕組みを街全体にひろげていく、というのは面白いと思ったわけです。
自分の家の本棚を見返してみても、いつ処分しても構わないのにタイミングを失ったままずっと置いてある本というのが必ずあります。それに、まだちゃんと読んでいないから、捨てていいかどうか判断しかねている本と、ずっと手元に置いておきたい本もある。おそらく、本棚の本は大体この3種類に分けられると思います。
これらの扱い方なんですが、いつ捨ててもかまわない本は、古書店に持っていけばいい。最近は、頼めば段ボール箱を送ってくれて、それに詰めて送れば買い取ってくれるシステムもできたそうなので、そうやって処分する。次の、まだ読んでいない本はそのままペンディングになるでしょ

う。最後の、ずっと持っていたい本は、さらに3種類くらいに分かれると思います。常に手元になくてもいいけれども、手放したくはない類の本、仕事や勉強などでよく使う本、それに愛蔵本の類です。
この中でも、常に手元になくてもいいんだけれども、手放したくはない本、僕もそういう本がすごくたくさんあるんです。この本はすごくいいんだけれども3年間ぐらい全然開いていないとか、それで本棚のスペースだけをずっと専有しているもの。多分そういう本が家の中にはたくさんあって、場所だけを専有しているわけです。それをみんなで共有するシステムがつくれないか考えました。
ここから先は口だけになってしまいますが、メディアテークに、古本市ではなく、本棚をつくって、そこにみんなと共有したい本を持ってくる。その本のオーナーシップは損なわないまま、みんなと共有するシステムがつくれないかなと考えました。
「仙台凡人展」というのは、街に住んでいる人たちがどういう特技を持っているかをデータベース化してという話がよくありますが、それとはちょっと違います。メディアが取り扱うには表現力とか、発信力とか、特徴とか、何か才能を持っていなければいけないけれども、話を聞いていくとどんな人でも人それぞれ豊かな人生を持っていますよね。そういう仙台の市井の人たちの100人とか、何人でも良いのですが、その人を介して町が見えてくるような人の展覧会ができないかなと考えました。
「日がわりマスターカフェ」は、あちらの店(クレプスキュール・カフェ)の営業と関わる話なので、ここでしていいのか、ちょっと迷うところがありますが(笑)、一応説明します。具体的なアイディアというより、事例です。
渋谷に昔「つぼ」という名前のバーがありました。カウンターだけで一坪ぐらいの、5人ほどお客さんが来ると埋まってしまう小さな店ですが、ここの面白いところは、マスターが毎晩交替するところです。ある日は靴のデザイナーさん、ある日は映画館の支配人さん、ある日はプロダクトデザイナーの何とかさんと、何曜日は自分の担当という形で、その担当の日に自分ができることをするのです。ある人はカクテルもつくって出す本格的なバーですが、ある人は缶ビールをたくさん買って来て、お客に出す(笑)。
この事例で思ったんですが、会ってみたいけれど、実際にその人に会いに行くほど差し迫った用事があるわけじゃない……という人は、結構いるのではないでしょうか。だから、たとえばカフェの一角に出店や屋台、あるいはカウンターみたいなものがあって、ある日は関口怜子さんであるとか、ある日は小野田泰明さん、というように、仙台で活動しているいろいろな人が日替りでそこのマスターをやっている。

そして、来た人はお茶を飲んだり、コミュニケーションを交わしつつ、場と時間を共有する。そんな感じの場所です。
以上、生煮えですが3つのアイディアを持ってきました。

渡辺――ありがとうございました。これから出てくるアイディアをどんな形でまとめるかは、後でまた相談しましょう。では次に杉浦さん、お願いします。

杉浦――実は、宿題を忘れてしまいまして、今日ここに着いてからつくっていました。ここに書いてある「智財創造ラボ」というのは、渡辺さんと一緒に東京を拠点にやっているプロジェクトです。情報や知識というよりも、コミュニティの人々の間で共有される「智慧」、つまり wisdom をどうやってつくれるか、それを支援する道具や活動をデザインするのがテーマです。また、最近横浜でクリエイティブサポートという、地域の市民活動をクリエイティブな面から支援することも始めています。
それでさっそく、メディアテークのことなんですが、先ほど、そこのナディッフ ビスで売っている『インターコミュニケーション』という雑誌を見ていたら、メディアテークについてちょうど奥山館長が原稿を書かれていました。この記事でも説明されていることですが、メディアテークの機能は、「読む」「調べる」「鑑賞する」「発表する」に加え、「協働」「プロジェクト」があって、さらにもう一段、「マネジメント」ということにも踏み込んでいきたい、と書いてありました。
僕自身は、ここ10年ぐらい自分の中でテーマにしていることは、一言で言えば「場づくり」です。その場において、いろいろな種類の人たちが集まって、事をつくるということです。いろいろな人たちが違いを超えて一緒に素晴らしいものをつくると、みんなが「イイなあ」という感じになってくる。そういう感覚は、かなり強力に人の中に残ることだと思っていて、そんな場をいっぱいつくっていこうとしています。本来は舞台をやっていたのに、地域やコミュニティに関わり出したのも、自分の中での捉え方としては「即興劇」だと思ってやっています。劇なので、カンパニーがあるわけです。そのカンパニーには、いろいろな役の人たちがいて、この人たち同士は結託し、示し合わせたりして動いていきますよね。ただ、世の中の人たちというのは、本当の役者とは違って、どう反応してくるか全くわからない。要するに、完全な即興です。そこで即興として起こってくることに、カンパニーとしてどううまく立ち向かっていくか。そこで僕が重要だと思っているのが、プロジェクトマネジメントの考え方です。
たまたまタイミングの合った人たちが楽しくやるというのも、それは

それでいい。ただ、それが持続して、お金も集まって事が進んでいくためには、拠点だとか、組織、その中のルールがすごく大事になってくる。また、関わっている人それぞれの権利や責任も問われてきます。今、僕は横浜で「協働のあり方研究会」という、行政や市民活動団体、企業など異なる関係者が100人ぐらい集まる場づくりに参加しています。仙台でもそうだと思いますが、市があって、県があって、国があって、地域にはいろんな組織があるわけですよね。大学だけとっても、たくさんあるでしょうし、市民活動団体でも、ユニークな方たちが数多くいらっしゃいますよね。地域の中にこうやってたくさん存在している、でも異なる組織や団体が協働しながら、どうやって地域の中で役に立つことを生み出していくのか、横浜の研究会ではそういう議論をしているところです。

この研究会でも話題になっていますが、最近「コミュニティビジネス」に注目が集まっていますよね。地域コミュニティの課題に対して、税金で賄う公共サービスだけでは立ち行かなくなってしまって、税金を使わずに世の中の課題が解決されていったらいいな、と国も自治体も思っています。行政的にはそういった観点からコミュニティビジネスに期待が高まっている状況があります。

一方で、僕は映像に関心があって、映像を中心とした地域コミュニティの財産がつくれたらいいなと考えているところです。トークセッションの時にも話が出ましたが、仙台では映画祭がこのメディアテークを舞台に行われていますよね。また、旬の話題としては、「せんだい・宮城フィルムコミッション」が発足したようです。

ちょっと調べてみたところ、仙台市長が会長になって、宮城県の副知事だとか歴々の人たちが集まって、今まさに組織がかたちになろうと

しているようです。この組織が新たにできたということは、一つのチャンスなのではないでしょうか。メディアテークの活動や映画祭、それにフィルムコミッションがうまく絡まっていくといいな、と思います。そのための関連企画、連動企画のアイディアを、後で参加のみなさんと考えたいと思っています。
映像を編集したり、蓄積したり、発信する機能は、メディアテークには既に整っていますし、他の公共文化施設にはないような立派なシステムや空間が、ここにはあるわけです。同時に、活動を支援するプロのスタッフもたくさんいます。もうちょっとうまくやったら、どんどん人が育っていくのではないでしょうか。
あと、少し端折りますが、都市と都市が連携して行えることも、たくさんあるはずです。どの都市も、実は同じような問題を抱えてその解決に向けたアプローチを模索していますが、それぞれバラバラに取り組んでいるために、なかなか打開策が見えないところもあります。それを打開するのに、ある街と他の街のまちづくりの関係者が、オープンに情報交流しながらやっていく方法がありそうだなと思っています。「君のところは、この問題にどんな風に取り組んでいるの？」とか「こういう研究をしているところはないかな？」といったことを、ネットワークで結んで話しあえるような場づくりです。
明日と明後日も、ちょうどこのメディアテークと東京・初台にあるNTT のインターコミュニケーション・センター（ICC）と同時中継の企画があるそうですね。この企画のように、テレビ会議などの新しい道具をうまく使って知恵を交換したり、ものづくりをしたり、それをプロデュースして商品化したり、人を育ててみる。行政の人も民間企業の人も、そして学生や市民も、いろいろな人が集まって、メディアテークという舞台を使っていけないかな、と考えているところです。

渡辺――ギリギリまで宿題をつくっていたわりには、中身が濃いのでびっくりです（笑）。続いて、前田さん、よろしくお願いします。

前田――私のテーマは、共有のデザインをするというからには、共有している部分を目に見える形にしたいというものです。
今回、せんだいメディアテークの資料を一通り読んだところ、少し気になるところがあったんです。それは、一番最初に西村さんから聞いた「自分たち事」という言葉の捉え方です。この言葉にいろいろな人が反応していますが、みんな少しずつズレているんだなぁ、と。
自分たち事という場合、「自分のことと、他人のことの間」、という風に捉える人もいますし、私自身は、「自分のことと、“みんな” のことの間」だと思っているのです。よく、こういう言い方があります。「ここ

は公共の施設でしょ、だから静かにしなさい」。でも、この言い方はどうもズレているような感じがします。
公共性というのは、世界規模のことか、国レベルのことか、あるいは地方か、地域レベルのことか、スケール感がみんな違っていても、実はだんだん縮小傾向になっている気がしているのです。仲間うちのことだけとか、目の前の友達のことしか実感できないような世の中になっているんじゃないでしょうか。
そうやって縮小しがちな公共性、仲間うちの共有感覚を何とかうまく紡いでいって、全体のスケールとしては大きいものをつくっていけないだろうか。だからといって、全ての人が一つのルールに従わなくてはいけないような状況ではなく、もっとフレキシブルに、緩やかな場、緩やかなコミュニケーションをつくれないかと思っています。
この絵（下図参照）を少し説明します。

左側の少し大きな円がせんだいメディアテークで、右側が目の前の通りを歩いている人々だとすると、自分たち事が生まれる領域というのは、友達と一緒に来て隣でしゃべっている２人とか３人、それらの人々がバラバラだけれども共存しているようなところだといえます。この中では、おしゃべりしている人たちもいれば、１人で黙々と勉強している人もいる。それで、スタジオ・トークセッションのようなイベントをこの場所で行うと、ちょっとしたテーマでもこれだけの人数をくっつけて、もしかしたら道を歩いている人も館内に流れてきて、さらに自分たち事の領域に入ってくるわけです。一つのテーマを与えることで、一見無関係だったものをつなげる働きを持つことができる。
ただ、これは必ずしも全ての人をつなげるのとは、やや違います。僕にとって図書館の好きなところは、公共空間の中に私的な空間をつくれる

ところなのです。電車の中で考え事をするのが好き、みたいなのと通じているかもしれませんが、公共の中に私的な空間をつくって、ちょっとした触れ合いの場をつくるということが理想だと思っています。
あるテーマでばらばらに自分たちの興味の範囲でどんどんつながっていくことで、スタジオ・トークセッションというのが一つのつながりだとしたら、その複数のテーマをどんどん投げ込んで、それもこちら側が出すだけではなくて、各人が任意にテーマを出してくっついていくことができれば、一番望ましいかなと思っています。
つまり、関心空間というオンラインサービスの上でやっていることを、メディアテークというリアルな空間の中でやってみたらどうだろうか、というのが今回の宿題に対する私のアイディアなんです。
具体的に、どういう成果が上がればそれが成功したかというイメージがつかめないと、考えるのが難しいと思ったので、関心空間の中で「せんだいメディアテーク」というキーワードを通して何か起こっていないか、今朝4時に起きてこちょこちょ検索して調べてみました。
関心空間の中で検索すると16件ひっかかりました。そのものズバリ、メディアテークの紹介をしている人と、ナディッフで売っているマウンテン・マウンテンのアリのポスターや、こちらで展示会をやった人だとか、雑誌の中で連載された記事の中でメディアテークのことが紹介されている、といったことなどです。
これらの情報同士がどういうふうにつながっているかというと、非常に多岐にわたっています。せんだいメディアテークという赤の点が5個ぐらいあって、そこから1、2個先にどういうふうに情報がつながっているか、手作業で視覚化してみました。例えば、「仙台つながり」で、仙台のある劇団やカフェ、斉藤報恩会自然史博物館という場所のこと、あるいは「本つながり」で、掲載されていた多木浩二さんと同じ歳の生まれの今井俊満さん……といったように、任意でどんどん情報がつながっています。これらは、メディアテークに関わっている人にしてみれば、わりに普通の情報かもしれませんが。
こうやって俯瞰的に情報のつながりの全体像を見ていくと、エルネスト・ネトという人の名前が見つかりました。僕は知らなかったので、ちょっと注目したんです。これがメディアテークとつながっている理由は、「メディアテークで展覧会をしてほしいつながり」でした。これは何か価値があるのではないかということで、さらにつながりの一つ先を調べたら、次は、ジョゼッペ・ベノーネというアーティストが、「気になるアーティストつながり」で出てきて、その次にはLOVEという立体造形をやっているアイルランド人のアーティストの作品がつながり、その先にはALLESI（アレッシィ）のちょっと不思議なデザインのポットや、フランク・ゲイリーという建築家が、どんどんつながって

います。
おそらく、せんだいメディアテークの関係者というのは、当然メディアテークのいろいろなことに詳しいはずですが、何リンクか先になると、自分の知らない情報がどこかに出てくると思います。私がさきほど話したように、自分の知識としての限界がどこかで見えてくる。その限界を一歩超える瞬間にドキドキしたり、感激する瞬間が来るのではないでしょうか。こういうのをみんなでワッと持ち寄って絵にしていくと、「せんだいメディアテーク的なもの」というのは、一体どこの範囲までなのかが、見えてくるような気がします。この、つながり3つ目ぐらいまではメディアテーク的と言えるけれど、この先はそうじゃないとか、みんなで考えていくことができるはずです。
心理学の用語に、「最近接領域」というのがあります。たとえば大人が子どもを教育するときに、知識を全部教えないで、ギリギリのところだけ手助けすることによって、その人の学習能力がそこで引き上げられるということがありますが、そのギリギリの領域のことです。「教えるから引き出すへ」というのが、西村さんや森川さんが主催されたワークショップフォーラムのテーマだったそうですが、まさにそれです。これで、せんだいメディアテークに関わった人間の最近接領域を視覚化できないかと思っています。
これは、情報単独だけではなく、人の関係を可視化することもできます。例えば、メディアテークをキーワードに取り上げている人が、他の何に関心を持っているかを見ていくわけです。こんな風に、みんなが情報を持ち寄って共有する場を、コンピュータやネットワークを通してではなく、付箋紙に書いてコメントをつなげていくような手作業でつくっていくことができるのではないでしょうか。そんなアイディアを考えてきました。

渡辺――なるほど。関心空間のような知識のつながりを、ワークショップ的に実際の場所でやってみるというのは面白い。ありがとうございました。それでは最後に、森川さんお願いします。

森川――私は、せんだいメディアテークにおける「共有のデザインを考える」というテーマの、継続した一つのコミュニティをつくってはどうか、ということを提案したいと思います。簡単に言うと、メディアテークという場の活用や運営を考えるコミュニティをつくろうということです。
宿題のための資料を読んだところ、メディアテークでは、明確な利用目的を持っている個人や、グループの活動は保障されているけれど、ここで一から立ち上がるものはどのように生まれてきているのか、す

ごく気になりました。たとえば、ここで展覧会をやりましょうというときに、それをつくっていくプロセスです。あるいは、このトークセッションの場以外にメディアテークを使って市民がプロセスを共有できる場があるのかどうかが気になりました。
それで、これは私の経験に基づくことなのですが、どういうときに人の集まるリズムが生まれてくるのかといえば、それにはいくつか条件があります。敷居が高くなくて、何となく寄りやすく、開かれた場があること。そして、その場はリーズナブルに使えて、足の便がいいこと。それから、後から来た人が、場に関わっている人の輪に加わったときに、ただお客さんになるのではなく「こんなことをやれるんじゃない？」と、ポンと背中を押してもらえるような環境があること。あと、今この場所もそうですが、スポットライトを浴びているような、ちょっとだけ非日常で、緊張感や高揚感があるところにも、人は惹かれるのではないかと思います。
もう一つ、私が大事にしたいと思うのは、共有の場面をつくることを決して急がないということです。誰かの思い入れだけで走るのではなくて、議論する時間をたくさんとりながら相応の時間をかけていくことが必要です。それから、リアルな空間に加えて、メーリングリストやウェブサイトも使いながら、みんなで空間と時間を共有していくこともこれからはもっと当たり前になっていくでしょう。
今日、私がここで提案したいことの中で大事なポイントは、コミュニティのルールづくりです。何かやりたいという思いでワッと集まってくる中で、勢いのあるうちはいいですが、実際にそれを具体化したり、つまずいたときに、その活動に対して一定の責任を負えないと、なかなか実体化していかない。アイディアや勢いだけで終わらせないようにするには、コミュニティのルールが重要なんですね。
また、自己満足や独りよがりになるのではなく、いろいろな人たちと相互評価し合えるような仕組みがあるということも大事です。信頼し合うことは大事なことですが、馴れ合ってしまうのではなく、ある程度の距離感があった方がいいでしょう。誰かのために別の誰かが頑張ったり、自分だけが楽しむのではなくて、そこにいる自分も楽しめて、チームで何かをやることも楽しめることを大事にしたいと思っています。
それから、自分たちのやってきたことを「道しるべ」として記録し、残していくことは、振り返り、確認するという意味と、後から興味を持った人や活動の外部にいる人に伝えていく意味と、二つの面で重要です。
コミュニティづくりにあたっての、メディアテークに対する期待は、いくつかあります。ライブラリーやギャラリーなど、素晴らしいポテンシャルがある中で、発表するだけではなく、運営や場づくりに関わ

れるような仕組みをどうやってつくれるのか、というのが一つ。「ここは公共施設なので、これはできるが、これはできない」だとか、「これはスタッフだからできること、これは市民のみなさんでもできること」というようなルールを最初に示していくことも必要だと思います。それから、生まれてくるもののプロセスを保証してほしい、というのが2つ目です。追い立てるでもなく、シャットアウトするでもなく、この場所から生まれるものを見守って、待っていくという姿勢が求められるのではないでしょうか。
今、私は「伴走」という言葉がとてもしっくりきています。先に走って引っ張ったり、後から追いかけるのではなく、横に並んで一緒に走るようなことをメディアテークに対して期待しています。それから、ここにはいろいろなリソースがあると思うのですが、それらのリソースの専門性にもとづいて、ルールや知識をナビゲーションしていただいたり、この先にどんな発展が描けるか実際につなげてあげたり、あるいは活動をさまざまな方面へ広報するといった部分で、活動と伴走し支援するような役目を担っていけると良いのではないでしょうか。
それで、今回みなさんと話し合ってみたいテーマが、以上述べてきたような、「活動のためのルールづくり」です。どんな人がどんなふうにメディアテークに参加してくるか。ここから生まれてくるコミュニティのミッションは何なのだろうか。公共施設であるということや公益をどう考えるのか。具体的にそのミッションを果たすために、自分たちは何を活動の手法として据えていくのか。必要な役割分担は何だろうか、組織そのものが永劫続くような組織であった方がいいのか、それとも任期を決めてやった方がいいのか。さらに事業のためのお金をどうやって捻出するのか。こういったルールを、メディアテークという場でいろいろな人たちがゼロからテーブルに乗せて考えていくことを、共有のデザインというプロジェクトのテーマに据えてみてはどうだろうか、という提案です。

渡辺――森川さん、ありがとうございました。というわけで、4人の方に、メディアテークでどんな「共有のデザイン」の活動を進めていったらいいかという宿題を発表していただきました。お互いにそれぞれ思うところもあるかもしれないですけれども、一つ僕からお聞きしますね。それぞれ持ってきていただいた宿題は、自分も一緒になってやりたいことですか。それとも、自分は関わらないがぜひ仙台でやってほしいということですか。

西村――僕は、まさに「自分たち事」なので、その両方です。できれば自分も関わりたいです。

杉浦――僕も両方です。今回持ってきたアイディアは、自分が横浜で今やろうとしていることと、興味があることが含まれていますが、仙台もすごく恵まれているので、自分の興味があることを実現するには格好の場所だと思っています。

前田――僕はミッション次第ですね。プライベートなミッションでも構わないし、パブリックなミッションでも構わないのですが、今回は手法としてアイディアを出しているけれども、ミッションは実はまだ共有できていないように思います。なぜメディアテークをリデザインするのか。そもそも何故リデザインする必要性を感じているかというバックグラウンドをもっと出してもらえると、良しとして伸ばすのか、悪いと思って変えるのか、そのあたりがハッキリしてくるんじゃないかと。

渡辺――ミッションや問題意識は、メディアテークのスタッフのみなさんや、今日来ていただいているような、メディアテークの周辺にいる人たちの方がお持ちだと思います。何かの問題が解決できる手がかりとして、こういうプランがつながっていけばおもしろいのではないでしょうか。

前田――セッションが始まる少し前に西村さんたちと話していた時にも言ったことなんですが、曖昧なことがこの館の魅力であれば、曖昧さをより曖昧にしてもいいと思うし、曖昧なことがアイデンティティになっていくこともありうるでしょう。あるいは、もっととがったイメージでインパクトを与えたいというのであれば、そちらに意思を向けることも、どちらも可能だと思います。

西村――僕は前田さんの意見とはちょっと違います。杉浦さんも多分そうかなと思うんですが、メディアテークによく来ることができる仙台在住の人たちと、僕らのような外から来ているけれどこの場所に面白さを感じている人間とが一緒に遊べたらいいな、という気持ちです。決して何か特定の問題を解決しようということではないんですよ。

杉浦――実は、どこにいても何だか帰属できないな、と感じている人に非常に共感を覚えるんです。「私は、ここにそぐわないのではないか」と感じていたり、居心地が悪いと思っている人や、アイデンティティを確立することにもがいている人などに対して、何かを促してみるということに興味を持ってやってきました。だから、このテーマやミッションという観点から言えば、自分はメディアテークや仙台の外の人間と言え

ばそうだし、一方で、まるで自分自身を見ているような感じもします。

渡辺――森川さんはどうですか。

森川――私は、お客さんとしてではなくて、もっとこの空間に巻き込まれたいと思っている人がいるんじゃないかな、と。自分たち事として、メディアテークに関わりたいと思っている人がいて、またメディアテークの側も、そういう人たちに積極的に関わってほしいと思っているんじゃないかな、と思っています。ですから、これから先のことを考えると、もっと市民を巻き込んだ形になるにはどうすればいいかを考えたわけです。それで、運営側の人と利用側の人が一緒のテーブルに着く場をつくってみるというのはどうかなと。

渡辺――それがあれば、活動の内容はどうであれ、人々が巻き込まれる仕組みができるということですか。

森川――ただ、それには、考え方の違う人や、多様な背景を持った人たちが集まって何かをするときに、事細かにルールを決めることは必要ないけれど、最大公約数的な、「これだけはルールとして守ろうね」と最初にきっちり決めて動かないと難しいのです。結局、自分が気に入らないからといって、やりたい人だけが最後に暴走してしまったのでは、何のためにやってきたのかという話になってしまいます。「みんなで共有できる最低限のルールはこれだよね」とすり合わせたところから始めるのがすごく大事だなと思っています。

西村――ところで、この先の進め方はどうなるんでしょうか？

渡辺――それを今相談しようと思っていたんです。最初は、４人のアイディアに対して、「これは面白そうだな」とか「これちょっと一緒にやりたいな」と思ったものがあるとしたら、それごとに島をつくってディスカッションしていったらどうかな、と考えていました。たとえば、西村さんとブックシェアマーケットのプランを考えたいとか、前田さんと関心空間的な何かをやってみたい、という進め方です。他に、小さく分かれずに全体でディスカッションするという案もあるでしょうね。ともあれ、一つずつのアイディアについて深掘りするのがいいか、どれかに絞らず全部についてフリーでディスカッションするのがいいか。

西村――全体でのディスカッションは、一部の人がマイクを持ってい

る状態ではなかなかできないと思うんです。だから、マイクを使わずに話ができるサイズに別れた方がいいのではないかな。それと、さっき出したアイディアを深めたいということでなくても、杉浦さんともっと話を深めてみるとか、森川さんともうちょっと話をしてみたいとか、そんな感じでカジュアルに分かれていくのはどうでしょうか。

渡辺――では、基本的にゲストごとに島をつくることはオーケーということですね。ほかのゲストの方もどうでしょう？

杉浦・前田・森川――はい。

渡辺――じゃあ、みなさん、それぞれ興味を持ったところに集まって、ブレインストーミング大会といきましょう。アイディアを膨らませたら、あとでまた全体でシェアしていきますので。

ここから、ゲストごとに参加者が散らばってグループがつくられ、ディスカッションが行われる↘

渡辺――というわけで、あまり十分な時間が取れなかったかもしれませんが、いったんここで全体でシェアしましょうか。西村さんのところはどんな話になりましたか？

西村――ブックシェアマーケットのアイディアを練っていました。家にある本で読まなくなってしまったものや、手放したくはないが滅多に開くことのない本を共有するプラットフォームをつくろうという

ことで、最初はこのオープンスクエアの空間でやったら面白いのではないかと話していたんですが、それではメディアテークからただ場所借りをしているだけの催し物と同じなので、ちょっと考え直していきました。
それより、3階にある市民図書館にもっとコミットしていく仕組みをつくったらどうか、という考えに至りました。何人かの方から出たのですが、「自分が借りたいと思う本が意外にない」「すぐに入館証をつくったのに、全然使っていない」と。自分が本を寄贈してでもいいから、みんなで図書館を育てていくようなことができないかということです。
図書館には、本を寄贈できますよね。寄贈された本というのは、図書館に入った後は普通の本と同じように並べられますが、そうではない共有と利用の仕方をつくります。「この本は、こんな理由からこんな人にお薦めします」とか、「この本の、ここの箇所がとても気に入りましたが、あなたはどうですか？」という手紙をつけておく。本を開くと、ページの間にその手紙がはさまっていて、どんな人が読んでどんな感想を持ったかという履歴が全部ついている。あるいは、この本を読んでいる人は、他にどんな本を読んでいるかが分かる。つまり、オンライン書店の「Amazon」がウェブ上でやっているようなサービスを行ってみてはどうでしょうか、というわけです。
公共サービスとしての図書館のシステムの外側に、「自分たち事」として共有できるサービスがもっといろいろと考えられるのではないだろうか、ということです。

渡辺――今後の盛り上がり方は、また次の機会に詰めていきましょうということですね。では、杉浦さんのグループはどうでしょうか。

杉浦――我々は、映像に特化して話をしておりました。集まってくださったメンバーが、地域で学生の映画祭をやっている人や、商店街と組んでアートイベントを仕掛けている人、それから仙台短篇映画祭の実行委員の方、それと NPO の中間支援をしているせんだい・みやぎ NPO センターの方が参加してくださって、話し合いました。
このメディアテークの拠点に絡めて、映像関連でどんなことができるのか、ですが、先ほどご紹介したフィルムコミッションの立ち上がりのプロセスにも、何人かの方たちが関わっているとのことでした。
それで、どうすれば個々の活動に恩恵があり、なおかつ活動が持続していけるかをテーマに意見交換をしたんですが、収益事業と非収益事業という分け方をすると、自分たちのつくりたい映画をつくったり、アート的なアクションを行っても、なかなか収益事業にはならないも

のです。ただし、映像をつくれる設備もあれば技術もある。人前に出てパフォーマンスをする度胸もあれば、技もある人たちは結構いるものですよね。
つまり、システムやリソースはちゃんとあるわけで、それらを活用してどうやって収益事業を展開するか。たとえば、フィルムコミッションが今後いろんなデータベースをつくっていく。その中には、仙台市内のいろんなポイントの情報があって、「ここに行けば、こんな絵が撮れます」と。場所の名称や住所や連絡先などの基本情報だけではなく、動画のデータも含まれていて、1ヵ所につき3分間の映像が見られるようになっているものを構築できると役立つのでは、という議論になりました。
そこから話が発展していって、NPOや市民活動の中には、福祉や、環境などいろいろな団体があり、それらとの連携の方法も考えてみました。特別養護老人ホームや、商店街と提携してやっている託児施設などが、フィルムコミッションのデータベースにあってもいいんじゃないか。そういう場所で何か撮りたいと思った人がいたら、商店街名物の仕切りのお兄さんやお姉さんが出てきて、映像で紹介されたりする。こういった、街の生きた表情を紹介するデータベースを、学生さんを含めた若手の映像作家予備軍の力を使ってつくっていくわけです。
仙台ムービーパーティーという、仙台の6大学が集まっていろいろな自主制作映画を見せるネットワークがあるそうですが、そこに参加しているだけでも数十人から100人規模で映像に関心のある人たちがいるわけでしょう。そういう人たちが街に暮らしている自分の眼や感覚を頼りに、映像のデータベースづくりをやっていくことを提案してみたらどうか。
それから、既にあるものを有効活用するという意味では、NPOセンターに全国や市内外の市民活動団体のリストがあるので、そういう情報もうまく絡めたいという意見も出ました。
これらの活動をアピールしていくためにも、メディアテークは非常に使える場所といえます。特に、ここから映像情報を発信していくような企画ができたらいいな、という話になりました。つまり、放送局機能みたいなものの実現です。フィルムコミッションに関連して言えば、仙台市内で映像化する価値のある場所や人のデータベースをつくっておく。それぞれ3分間の動画データになっていれば、1日で10個30分間の映像を、ここをサテライトスタジオにしてインターネットで配信していく。時間がもっとあったら、もっと具体的になったところなんですが、その辺でタイムアウトでした。

渡辺――では、ずずっとこちらへ移動して、森川さんのグループ、よ

ろしいでしょうか。

森川――組織づくりをどうしようかという話をする前に、何か始める時、どこに集まってどんなふうに生まれているかという話をしました。そうすると、カフェでとか、立ち話でとか、日常のふとした場面でアイディアが出てきて、それに人を巻き込む形で生まれていったり、何となく思っていたことを言葉にすると、それに共鳴、共感する人があらわれて、では次にどうしようかとだんだん膨らんでいくものがあるね、といったことが確認できました。
また、夜は遅くまで開いているところは多いのに、朝に集まれるところが意外にない。朝集まって話をするとなると、ホテルや個人の家になる。それから、出入りしているお店を拠点にして、人との関係が生まれることがあるんじゃないか。もう一つ、学校のサークルスペースが24時間利用できるから、行くと必ず誰かに会える状況があるので、そこで接点が生まれてくる、という話もありました。
このような場で出会いが生まれ、次にいつ会うかを考えている時間がだんだん長くなって、話しているうちに何らかの形にしたくなってくる。共有している部分、重なっている部分が広がったり、濃くなっていくことで仲間が生まれていくのではないか、という話も出ました。
以上の話を踏まえて、コミュニティにおけるルールの話に移っていきました。ルールが必要になるのはどういう場面なのか議論しましたが、例えば、何か会合を開くときに、出席するかどうかの返事すらも次第に返ってこなくなると、結構つらいという意見が印象的でした。また、自然発生的に活動が生まれてくるときに、最初は100円、200円といったレベルで持ち出して、具体的な形になっていく時にお金をどうしようか決めかねているうち、結局もっと多額の持ち出しになってしまうということが問題だという指摘もありました。
他には、実際に組織をつくることと、自分自身の体験がどこかでつながったかどうか？　という話をし始めたところで、ちょうど時間になりました。

渡辺――もう少し時間があれば、具体的なルールの問題に入っていけたかもしれませんね。では、前田さんのところに行きましょう。

前田――先ほどの私のアイディアに対しては、「メディアテークは、新しいメディアと本というオールドメディアが重なっているところが特徴なんだから、別にあえてアナログにする必要はないんじゃないか」という言葉をいただきました。なので、その見せ方としてコンピュータを使うのもありかなと思った次第です。

実は、議論の中身は西村さんのところで出た話と近くなっていて、ラブレターの話がずっと出ていました。岩井俊二さんの『Love Letter』という映画がありますよね。本にはさんであったラブレターを通して、コミュニケーションするというような話。結局のところ「出会い系じゃないか」という、ちょっと危険な方向に話題が向かってしまいましたが（笑）。こうやって人と人が出会っていく際に、出会いの信用担保として、何らかの空間があるということです。
他に話題として出たのは、メガネ型のディスプレイ（HMD）などをかけていて、ある人の方向を見ると、その人の読んでいる本に関する情報がディスプレイに表示され、その情報をきっかけに会話ができるようなアイディアです。これらのコンセプトは、すでに技術的には実現可能になってきているので、後はそれをどんな見せ方でやるかというデザインの問題になってきます。以上、本をテーマにして人と出会うことを一つのプロジェクトにしたら、それは共有のデザインというコンセプトにピッタリのものになるんじゃないかというので最後に盛り上がりました。

西村――メディアテークのコンセプトブックには、この場所はプロジェクトがたくさん生まれてくるような場になって欲しいということが書かれています。要するに、それは新しい人の組み合わせがたくさんできることだと思うんですよ。そして、新しい組み合わせが生まれるには、どういう人がどこにいるのかが、まずは見えるようになるのが大事なんですよね。

前田――すごく難しいのは、ラブレターが100通入っていると、もう何だかワケが分からなくなるという問題です。そこを解消するには、やはりコンピュータに強味があるんですよね。

渡辺――でも、西村さんのブックシェアマーケットと、前田さんのアイディアを融合して、一つのプロジェクトの種として育てていくと、何か面白いものができそうな気がしてきますね。

前田――僕の方では、「仙台凡人展」というのも本でやってもいいんじゃないかという話もしました。たとえば、「46歳、農業、最近こんな本を読んでいます」というリストがあって、仙台に住んでいる普通の人のお薦め本が分かるようになっている。それが堂々と3階の市民図書館にパーッと並んでいるというのも見せ方ではないでしょうか。ブックシェアマーケットを、一般の人が出入り自由でオープンな1ヵ所の会場でやってしまうと、逆に顔が見えなくなる可能性があるので、そこの

強弱をつける手段も一緒に考えるべきではないかと思っています。

渡辺――残り時間があと10分を切ってしまいました。これではいくら何でもまとめようがないんですが、個々のアイディアについては、まだ十分に煮詰まっていないですよね？　ネット上で関心空間やメーリングリストを使いながら、今日の話の延長線をやるというのも一つの手ですが、ネットだけでやるのも限界があるので、やはり何らかの形でこのメディアテークという実際の現場に則してまとめていきたいところです。今日は、一年間続いた企画の最後なので、これはこれで一つ区切りになりますが、新年度以降どうやって今日の話を育てていけるのか、これが問われてくるのかなと思っています。それまでの間に少し心の準備をしておきましょう。
おそらく、来年度以降は、仙台の外から再びいろいろなゲストを招きつつも、実際にプロジェクトを起こすのは仙台に住んでいたり、あるいはこうした試みに共感し場を共有できる人たちを巻き込みながら行う、ということになるのではないでしょうか。果たして、実際にカタチになるのが、今出てきたような、本にラブレターを挟んでいくものになるかどうかは分かりませんが、プロジェクトとして前に進んでいくことだけは確認したいと思います。今日は、世界情勢としてはまさに有事ですが、僕らとしては戦争をするほど暇ではない人たちがここに集まっているんだと思います。僕らは、それぞれの現場できちんと共有のデザインをしていくのが大切だと、改めて感じさせてくれる日でした。本当にみなさん、お忙しいところ、大変ありがとうございました。